
令和8年度 第1回午後（2科目）

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和8年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は25ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の——線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 失敗することのカチを理解している人こそが成功する。
- ② ソンケイしている画家に会いに行く機会に恵めぐまれた。
- ③ 昨日、イガイな相手から手紙が届いた。
- ④ 留学するため作成した書類がショウウニンされた。
- ⑤ 自動車工場にはセイミツな機械が多く並んでいる。
- ⑥ どんなことにもゼツタイはないと心に留めておく。
- ⑦ 王をゴエイする兵士たちは城門を固めた。
- ⑧ 新しい体育館には給湯設備が整っている。
- ⑨ 貧富の差がどのような影えい響きやうを与あたえるのか調べる。
- ⑩ 定石通りの戦法を信じぬいた結果、勝利することができた。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

時代のなかの「私」

① 広くいって、「私は私が思うように生きているんだ」と素朴には考えられているかもしれませんが、そのような考え方を（注1）四つの観点から見直していきたいと思えます。一つめは「時代」という観点です。主に用いる二つの若者調査のうち、都市調査は一九九二年から一〇年おきに行われているもので、各時点の意識のあり方を比較することができま

す。二〇一二年までの動向については、研究会がまとめたいくつかの本にまとめられているのでそちらをみていただくとして、本書では一二年と二二年の間の変化について考えていくことにしましょう（二二年調査と同様の方法で調査がなされていますが、細かいところは研究会がまとめた本、もしくは研究会のホームページをご覧ください）。

	都市若者調査	全国若者調査
調査時期	2022年11月～2023年2月	
調査対象	東京都杉並区、兵庫県神戸市灘区・東灘区在住の16～29歳男女	全国の16～29歳男女
抽出方法	住民基本台帳を用いた層化二段無作為抽出	
調査方法	調査員による訪問留置回収法（一部郵送回収法併用）	
計画サンプル	2400	2400
サンプル回収率	26.5%	38.6%

表1 青少年研究会2022年調査の概要

項目	2012	2022
今の自分が好きだ	65.3	72.9
今のままの自分でいいと思う	51.4	63.1
自分がどんな人間かわからなくなることがある	48.9	51.7
仲のよい友だちでも私のことをわかっていない	28.0	34.0
意識して自分を使い分けている	49.4	37.4
自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある	55.7	52.6
他人とは違った、自分らしきを出すことが好きだ	50.6	52.8
自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていると安心だ	35.0	46.1

※それぞれ、項目について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」のいずれかを回答してもらう方式の設問になっている。表に掲載されている数値は肯定回答率、つまり「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合算値である（無回答は集計から除外している。ここまでは以降、表7まで同様）。有意水準は5%で、肯定回答中の多い方に側面付けをしている（これについては表5まで同様）。

表2 自己意識の経年比較（%）

表2は、「私」に関して思ったり感じたりしていることとしての「自己意識」に関する設問の回答傾向について、都市調査の（注2）二時点間で変化がみられた項目をまとめたものです。ここでいう「変化がみられた」というのは、統計的検定の結果、^②有意な差がみられたということを意味しています。もう少しかみ砕いて説明すると、表2での経年変化には、三%くらいしか変わっていないものから一〇%以上変わっているものまで色々ありますよね。こうした変化が誤差の範囲に過ぎないものなのか、誤差では片づけられない確かな（意味のある）差だとみるべきなのかを、調査データにもとづく計算結果から判断するのが統計的検定という

手続きです。青少年研究会調査には、自己意識に関する設問が他にも多く含まれているのですが、そのうち統計的検定の結果、確かに差があると判断された項目を表2に掲載しています(表2から表5までは、^(注3)カイ二乗検定という手法を用いた結果を掲載しています。また、本書では統計的検定についてはごく簡単な説明しかしていないので、興味のある方は専門の本を読んでみてください)。とはいえ、表に示されている差は数%の差、つまり程度差であって、こちらの方が白、あちらの方が黒といったはつきりした区分けが可能になるようなものではありません。

さて、ここからはいよいよ表2の内容をみていくことにしましょう。上から順に傾向を言葉にしていくと、まず最近の若者の方がより「自分が好き」で、「今のままの自分でいい」と思うようになっていきます。これだけみるとよさそうな傾向だと思われるかもしれませんが、その一方で近年の方が「自分がどんな人間かわからなくなること」があり、「仲のよい友だちでも私のことをわかっていない」と思うようになっていきます。^③自分自身にとっても、仲のよい友だちも自分のことが分からないと思っているのに、そんな自分が好きで、そのままでもいいと思っているというのは、何となく矛盾しているようにみえないでしょうか。

解釈の素材を足すために、表2下側の項目もみていきましょう。近年の方が「意識して自分を使い分け」るようになっていく一方で、「うわべだけの演技をしているような部分」はなくなってきました。使い分けが当たり前のこととして、無理なくできるようになっていくことなのだと思います。また、「他人とは違った自分らしさ」は求めず、「他人と同じことをしていると安心だ」と思うようになっていきます。これらの変化について、どのような解釈が可能でしょうか。

筆者は、次のように考えると、経年変化の全体を貫く解釈ができるのではないかとみています。解釈の軸として選びたいのは表2の最後の二項目、他人に合わせることに関する項目です。二〇〇〇年代中頃あたりから数年ほど、「X」という言葉がよく使われた時期がありました。他人に合わせることにについての肯定回答率が近年さらに高まっていることを考えると、そのような感覚は実態としてますます強まっているとみてよいでしょう。こうした感覚の強まりに関して考えないわけにはいかないのが、この一〇年間でほぼ^(注4)「インフラ」のようになったスマートフォンやSNSの定着です。一二年の時点でもスマートフォン利用者は七二・八%でしたが、二二年では実に九九・七%に達しています。SNSについても、一二年時点で七六・四%が何らかのSNSを利用していましたが、二二年では九三・九%とやはり非常に高い値になっています。さらに二二年調査

では「もつともよく使うSNSでは、複数のアカウントを使い分けている」という質問項目を設けており、その肯定回答率は五七・二%とかなり高くなっています。LINEの登録グループ数も平均四〇・三にもなります。さまざまな人といつでも・どこでも、さまざまなかたちでつながりうるこのような状況じょうきょうにおいて、そうした人たちの目が気になり、まわりに合わせた方がいいという感覚が強まってくるのは自然な流れだといえるでしょう。

また、こうした状況は自己の使い分けを以前より加速させることにもなるでしょうが、自分の思い通りにできる細かい操作や切り分けが今日では可能になっており、負担がかかる場からの撤退てつたいも以前よりは容易になっていたために、うわべだけの演技をしているという感覚が低減することになるのだと考えられます。ただ、こうした使い分けの加速は自分自身にとっても自らを見失わせることになり、仲のよい友だちであっても知りえない側面を発生させることとなります(実際、これらの項目の回答傾向は相関しています)。ですが、全体としてまわりに合わせた方がいいという感覚が強まっているなかで、自分をうまく使い分け、波風立てずにふるまうことのできている自分自身に満足して、まあそれでいいかと思っているというのが近年の若い人たちの自己意識の総体的傾向なのではないでしょうか。表2でみた傾向変化は青少年研究会が行った全国大学生調査の二〇一〇年・二〇一一年データを比較してもおおむね同様といえるので(牧野二〇二四)、二〇一〇年代後半以降の日本の若者に生じた、自己意識の確かな変化といつてよいように思われます。

「自分のことが好き」かどうかといったことは、Yだと感じられるかもしれません。しかし、このように時代のなかで変わっていく側面があるのです。こうした変化の原因を考えていくとすると、その項目だけをみても限界があります。他の自己意識項目の変化や、それ以外の項目との関係を合わせてみていくことで、一見主観的なことがらがどのように社会のなかで変化しているのかを考えていくことができるわけです。

また、このように④ 調査データにもとづいて考えることそれ自体の重要性も指摘ししてきしておきたいと思えます。マスメディアやインターネット上では、「最近の若者は自己肯定感が下がっている」というようなことがしばしば言われ、そうした通説がときに教育改革の根拠こんきょとして持ち出されるようなことがあります。日々大学生に接していると、当人たちからそのような見方が示されることもあります。しかし、みてきたように今の自分が好きだという若者は近年むしろ増えているのが実態です。「最近の若者は自己肯定感が下がっている」というような見方は、あてはまりそうなエピソードを思いつきやすいので何となく賛同してしま

いそうになるのですが、実態に即して考えていくことで、「私」をめぐる通念から距離をおいて冷静に考えることができるようになるのです。

社会的状況による「私」の違い

いまみてきたのは「私」をめぐる経年的な変化でした。「私」についての考え方を見直すための残り三つの観点は、いずれも同時点における内部比較に関するものです。つまり、若者をひとまとめにして考えるのではなく、その(注5) 社会的属性や置かれた状況によって分けて考えようとするものです。若者を分けて考える観点は色々とありえますが、ここでは「性別」「学生か有職者か」「経済状況」の三点から考えていくことにします。なお、ここからは表1で示した二つの若者調査のデータのうち、全国調査のデータを用いていくことにします。

今どきの「男らしさ」「女らしさ」

先に触れた「最近の若者は自己肯定感が下がっている」というような若者論と同様に、「男は〇〇」「女は△△」といった見方も世にあふれています。こうした見方も実態にもとづかないさまざまな先入観・固定観念にまみれているのですが、この場合特に問題なのは、それが「本質主義」的な見立てをとることが多いところ です。つまり、男性ないし女性が生来的・本能的にこうなのだ、というような。男女に生来的な差がまったくないとはもちろん言わないものの、少なくとも自己意識をはじめとした意識や行動のあり方は非常に多くの側面が社会のなかで形づくられ、また変化していくものだと考えた方がよいように思われます。そのような観点から、二〇二二年全国調査のデータをみていきましょう。経年比較と同様に、自己意識項目のなかから統計的に有意な差がみられたものをピックアップした結果が表3です。

表3をみると、男性の方が「自分が好き」で、「他人とは違った自分らしさ」「自分の主張」を押し出していくような傾向があるといえます。一方、女性の方が肯定回答率の高い項目が多くなります。「自分がどんな人間かわからなくなる」傾向や、「今の自分とは違う本当の自分」「今とは違う人生」についてより思いを馳せる傾向があります。また、「大切なことを決めるときに自分の中に複数の基準があつて困ること」がより多く、「ふるまい方が場面によって違っている」ことや「うわべだけの演技をしているような部分」をより感じてもいます。素材にみると、Zと捉えられるかもしれませぬ。

	男性	女性
今の自分が好き	74.6	65.3
他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ	55.1	47.4
たとえ孤立しても自分の主張は通したい	45.0	30.5
自分がどんな人間かわからなくなることがある	41.6	32.1
どこかに今の自分とは違う本当の自分がある	29.6	38.0
今とは違う人生もあったかもしれないと思う	69.7	75.6
大切なことを決めるときに、自分の中に複数の基準があって困ることがある	60.2	70.3
自分のふるまい方が場面によって違っているなど気づくことがある	60.4	69.3
自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある	45.5	55.3

表3 自己意識の性別差 (%)

ですが、もう少し複眼的に考えてみましょう。女性の自己意識の傾向は、若い女性が置かれていた社会的状況から解釈できるところが大いにあると思われれます。まず考えるべきは、ライフコースをめぐる規範との関連です。この調査データ上では、男女間で就業率や(注6)雇用形態(正規雇用・非正規雇用など)の違いはほとんどみられないのですが、男性の方が「デートは男性がリードすべきだ」「どんな社会においても、男らしさや女らしさはある程度必要だ」「家事や育児は、夫ではなく妻が中心的に担うほうがよい」「一家の家計を支えるのはやはり男の役割だ」といった、いわゆる性別役割分業を肯定的に捉える傾向があります。つまり、男性の方が従来の「男らしさ」「女らしさ」を(注7)踏襲する傾向があるわけです。

そして、そのような男性において従来のライフコースは「一家の家計を支える」べく働くことになり、自分から、自分の人生の行く先も定めやすく、自分自身をふりかえってこれていいのか疑問を抱くようなことは起こりづらくなると考えられます。むしろ表3上部にあるような押し出しの強さこそが期待されたり、身につけようと思われたりすると人生の「男らしさ」「女らしさ」を信じる程度が弱く、また実際に今日でも男性に比べると人生の行く先は多元的で不確実な傾向が強いので、今の自分を相対化して捉えるような瞬間がより多く発生するのだと考えられます。このように、女性の自己意識の傾向は素朴に本質主義的なものとして考えるべきではなく、^⑤女性の生き方をめぐる規範やそれを支える社会的状況に結びついたものとして捉えられる側面が大いにあります。

また、より日常的なコミュニケーションにおいても、LINEの一日平均メッセージ数は男性一四・三に対して女性一七・七、登録グループ数は男性二四・〇に対して女性二七・一とそれぞれ女性の方が多くなっています(都市調査の平均値と比べるとかなり少なくはあるのですが)。メッセージをやりとりしたり(おそらく一緒に過ごしたり)するグループの細分化したあり方、多くのメッセージをやりとりするコミュニケーションの濃密さが、基準の複数化、ふるまい方の違いや表面性についての気づき、今とは違う自分の想像といった自己意識の社会的性差をつくりだしている側面もまたあるように思われます。こうみてくると、

女性の自己意識は「定まりがない」ということではなく、ライフコースやコミュニケーションの多元性に対応して生じた「感度の高さ」ということでもできるのではないでしょうか。

ただ、このような傾向もまた状況によって変わってくるものです。二〇二二年全国調査と合わせて実施された中年調査(三〇〜五九歳調査)や、二二年都市若者調査で性別比較を行うと、一部の項目は統計的な有意差が同様にみられるものの、有意差がみられなくなる項目もそれぞれ複数出てきます。ですから、分析によって見出された違いは、その時々で若年男性と若年女性が置かれている社会的状況や、性別によって要請・期待されるふるまいのあり方が異なることが自己意識に影響しているとみて、都度その違いのあり方を解釈していく必要があるでしょう。時代や年齢の違いにかかわらず繰り返し観察される性差も一部あるのですが、社会学の立場はそれらについても本質主義的に考えるのではなく、より長い歴史的(注8) スパンのなかでいかに形づくられてきたのかを考えていく方に関心をもっているといえます。

(牧野智和『社会は「私」をどうかたちづくるか』より)

(注1) 四つの観点Ⅱ「時代」「性別」「学生か有識者か」「経済状況」の四つだが、ここでは「時代」「性別」について書かれた部分を掲載している。

(注2) 二時点間Ⅱ二〇二二年と二〇二二年に実施した調査の間。

(注3) カイ二乗検定Ⅱグループごとの違いが本当にあるのか、偶然そのように見えるのかを調べる手法。

(注4) インフラⅡ道路、電気、ガス、水道、通信網など、社会や経済、生活を支える基本的なサービスのこと。

(注5) 社会的属性Ⅱ性別、国籍だけでなく、職業や所属、人間関係など、社会生活における個人の位置づけを表すもの。

(注6) 雇用形態Ⅱ従業員が企業でどのような立場や条件で働くかを示す種類。

(注7) 踏襲Ⅱ以前から行われているやり方や方針などを引き継ぎ継続すること。

(注8) スパンⅡ幅、期間、長さのこと。

問1 — 線部①「広くいって、『私は私が思うように生きているんだ』と素朴そぼくには考えられていくかもしれませんが」とありますが、この表現から「私は私が思うように生きている」と思うことに対して、筆者がどのように考えていることがわかりますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私は私が思うように生きている」と思うことは本当にそう言えるかわからない。

イ 「私は私が思うように生きている」と思うことはあくまでも個人の自由である。

ウ 「私は私が思うように生きている」と思うことはまちがいのない事実である。

エ 「私は私が思うように生きている」と思うことは大きなまちがいである。

問2 — 線部②「有意な差」とありますが、どのような差のことでしょうか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 調査において、複数のデータを組み合わせぶんせきて分析した結果として得られる差のこと。

イ 調査において、誤差のように見えるわずかな違いちがでも、変化として認められる差のこと。

ウ 調査において、偶然ぐうぜんではなく確かな変化だと意味づけられ、統計的に信頼しんらいできる差のこと。

エ 調査において、ある一定の範囲はんい内での変化として算出された計算結果の差のこと。

問3 — 線部③「自分自身にとっても、仲のよい友だちも自分のことが分からないと思っっているのに、そんな自分が好きで、そのままがいいと思っっている」とありますが、このような調査結果を受けて、筆者は若者の自己意識をどのように解釈かいしゃくしていますか。「」状態。」に続く形で三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問4 空らん X にはいる言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 腹を割る
- イ 顔を売る
- ウ 気をもむ
- エ 空気を読む
- オ 人目を盗む

問5 空らん Y にはいる言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 性別や育った環境の違いなど、社会的な制約による影響を受けるもの
- イ 一見してごく主観的なことから、社会とは何の関係もないもの
- ウ いかにもまわりの人たちから前向きな評価を受け続けてきたか
- エ 他人とは違った自分らしさを持ち、その姿を貫けているか

問6 ——線部④「調査データにもとづいて考えることそれ自体の重要性も指摘しておきたい」とありますが、なぜ「調査データにもとづいて考えること」が「重要」なのでしょう。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マスメディアやインターネット上にはあまりにも多くの情報があふれていて、何が重要かわからなくなるから。
- イ 世の中で生じていることはすべてデータとして表すことができるので、そうしたデータは尊重するべきだから。
- ウ マスコミやネットメディアが発信する通説から距離を置いて、冷静に考えることができるようになるから。
- エ データを重要視しないと、自分が過去に得た情報の信頼性を確認し直すきっかけを失ってしまうから。

問7 空らん Zにはいる言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 男性の方が積極的で、女性は自己意識に定まりがない
- イ 男性の方が他者を意識し、女性は自身の過去の過去を気にする
- ウ 男性の方が情熱的で、女性は冷静に物事を判断する
- エ 男性の方が力強さを求め、女性は穏やかさを求める

問8 表3「自己意識の性別差」について説明したものととして、明らかにデータを読み間違えているものを次の中から一つ選び、

記号で答えなさい。また、間違えている理由を説明しなさい。

ア 男女ともに「自分のふるまいが場面によって違っている」認識と、「うわべの演技」をしている意識には一〇%以上の差がある。

イ 男女ともに「今とは違う人生もあったかもしれない」と答えた割合も、「今の自分が好き」と答えた割合も比較的高い傾向にある。

ウ 男女で最も意識の差が大きかったのは、「自分がどんな人間かわからなくなることがある」という項目で、その差は一〇・五%ある。

エ 女性は「どこか今の自分とは違う本当の自分がある」と答えた割合が男性よりも高いが、女性の中でも四割を下回っている。

問9 ―線部⑤「女性の生き方をめぐる規範きはんやそれを支える社会的状況じやうきやう」とありますが、具体的にどのようなものだと説明

されていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女性は家事や育児を中心に担になうべきだという規範や、女性の雇用形態こようけいたいは非正規雇用が多く安定していないという社会的状況。

イ 従来のな「男らしさ」「女らしさ」に縛しばられるべきではないという規範や、働き方などに自身の選択せんたくの自由が認められている社会的状況。

ウ 女性も自分らしさを積極的に表現して生きるべきだという規範や、今の自分を相対化たうたいかして捉とらえる機会がより多いという社会的状況。

エ 従来のな性別役割分業に従い家事や育児を担になうべきであるとする規範や、人生の見通しが不確かな傾向にあるという社会的状況。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

主人公の十斗は小学校五年生の少年で桃亜という双子の姉がいる。ふたりともバレエに取り組んでおり、ペアを組んで大会に出場している。以下の場面は、発表の出番を終えて控え室で家族やバレエ仲間と談笑している場面である。

そのまま今夜の夕飯のおかずを何にするか話し合っていると、突然、後ろから誰かに頭を叩かれた。

「十斗、ここにいたのね。凄く探したんだから」

その声で、犯人が誰なのかすぐに分かる。

「いきなりやめてよ！ 痛いだろ！」

振り返りながら叫ぶと、桃亜が僕を睨んでいる。いつの間にか花柄のブラウスに着替えており、大人っぽい黒鳥の（注1）オ

ディールから、普段の子供っぽい姿に戻っていた。

「あんた、本番中にすっかり私の腰を支えなかったでしょ？ リフトの時はガッツリ支えてって、練習のたびにあれだけ言うたじゃん。もしも事故ってたら、どうするつもり？」

完璧な踊りが出来なかったのは申し訳ないが、僕だって桃亜に直してほしい点は沢山ある。例えば、回転する時はもつと軸を意識してほしいし、アイコンタクトもしてほしい。でも、それを言えば彼女の機嫌が悪くなると分かっているのだから、黙っているだけだ。

肩や背中を叩かれ続けていると、私服に着替えた同じ教室の子達が何人か集まって来た。その中に、七海ちゃんもいる。

「あゝ！ また桃亜ちゃんが十斗君を虐めてるゝ！ 可哀想ゝ！」

彼女達は口々にそう言うけれど、実際には笑ってこちらを眺めているだけだ。唯一、七海ちゃんだけは心配した様子で僕を見つめている。だが、だからと言って、桃亜の動きを注意したり止めたりすることはない。

家族なら助けてくれるだろうと思いい「ママ！ ママ！」と何度も呼んでみたが、ママも他の子と同じように笑って見ている。

①この状況を、双子のじやれ合いだと思っっているのだろう。

桃亜よりも力の強い僕から仕返しするわけにもいかず、どうすることも出来ず泣きそうになる。その時になって初めてママが「そろそろやめてあげて」と言っただけながら桃亜の手を身体から離してくれただけで、彼女は構わず僕を叩こうとし続けた。でも、その時A救世主が現れた。

「こら！桃亜、何やってる。十斗が可哀想だろう。やめなさい」

入り口の方向からネクタイを緩めたスーツ姿のパパがやって来て、桃亜を叱ったのだ。

「二人共、ごめん。さつき仕事が終わって、本番は間に合わなかった。でも、桃亜と十斗の勇姿はママがバツチり見届けてくれたから安心だ。さつきリカ先生と廊下ですれ違ってパパからもご挨拶をしておいたから、今日はもう車で帰ろう」

パパは急いで会場に駆けつけてくれたようで、腕まくりをしたシャツの袖で額の汗を拭う。

、パパ大好き、な桃亜の顔が、一気に輝く。僕もパパのもとへと駆け寄ろうとしたが、勢い良く桃亜に肩を掴まれて囁かれた。

「パパが来たから、これ以上言わないけどさ。十斗の一番大事な役割は、私を綺麗に魅せることなんだからね？
②皆、お月様じゃなくて太陽を見たいの。それを常に忘れないで」

そう言う彼女は、走ってパパに駆け寄る。その姿を見ながら僕は、勢いに押されて何も言い返せなかった。

その夜は、ママがハンバーグを作ってくれた。いつもは僕と桃亜が太らないようにお豆腐でしか作ってくれないけれど、今日は発表会を終えたご褒美にお肉で作ってくれることになり、僕は帰宅後ずっとワクワクしていた。

「できたわよ」

ママの一言で全員、食卓につく。熱々のデミグラスソースがかかったお肉の塊を見た瞬間、テンションが上がり思わず「よっしゃあ！」と大きな声で叫んでしまった。

すかさず桃亜は「ハンバーグくらいで子供みたいに喜ばないでよ」と僕を注意し、パパは「実際にまだ子供なんだから許してやれよ」と笑い、ママはそんな僕らの様子を愛おしそうに見つめている。

お箸で一口大に切って白いご飯と一緒にかき込むと、肉汁がジュワツと広がり幸せな気持ちになる。夢中で頬張りすぎて、すぐに食べ終えてしまった。

「……ちよつと十斗、もう全部食べちゃったの？ 早く食べると太るわよ。もつとゆつくり食べる癖をつけなさい。あと、おかわりは絶対に禁止ね」

ママは早食いの僕に驚き、桃亜は太らないように付け合わせの人参のグラッセを黙々と食べ、僕は久しぶりのお肉に興奮している。それぞれの姿をパパは可笑しそうに眺めて「皆、忙しそうだなあ」と呟いていた。

まだ食欲が全然満たされない僕は、麦茶のピッチャーを取りにママがキッチンに立つ隙にこっそり「一口ちようだい」と桃亜にお願いしてみる。当然のように断られたので、人参のグラッセと交換を提案してみたが、結果は同じで落ち込んだ。

見かねたパパが「俺の分を分けてやる。その代わり十斗は男なんだから、心も身体も大きくなれよ」と言っ、お箸で自分のハンバーグを僕のお皿に分けてくれる。嬉しさのあまり一気に頬張ると、食卓に戻ってきたママが呆れながら言った。

「パパ。ダメよ。バレエの世界では体重のコントロールも大事なんだから」
パパは動じず、「たまには良いじゃないか。俺だって、子供達に美味いメシ食わせるために頑張っ、働いているわけだし」と言っ、僕を庇う。

それを聞いた桃亜が口を尖らせ「パパはいつも十斗ばかり贖する！」と叫び、不機嫌な顔になった。パパは「我が家のお姫様がご立腹だ」と言っ、彼女の頭を撫でる。

僕ら家族の、ありふれた光景。ありふれた日常。可笑しくっ、愛おしかった。

食後は久しぶりにプレステで遊ぶことが許され、パパと遊戯王カードで遊んでからお風呂に入り、パジャマに着替えた。僕が浴室から出ると、ママと桃亜が何やら食卓で雑誌を眺めている。

「何読んでの？」

冷蔵庫から麦茶を取り出しながら何気なく尋ねると、彼女達は「なんでもない。女だけの秘密」と言い合、イタズラな表情で笑う。はぐらかされた気がしたけれど、それ以上、僕は追及しなかった。夜九時。二階に上がり子供部屋の二段ベッド上段に潜り、ふと思う。色々とあるけれど、毎日楽しいな。大好きなパパとママと、一緒に踊ると最強の桃亜がいる。きつと、

こんな日々がずっと続くんだらうな。そんな風に思った。

翌朝は月曜で、僕と桃亜は六時に起きると日課であるストレッチをしてからご飯を食べ、放課後のバレエ用にタオルと水筒、シューズ入れ、レッスン用のバッグをママに用意してもらい学校に向かった。

本当は学校におやつを持って行くのはダメだけれど、学校とバレエの間に僕らのお腹が空かないように、ママはお手製の骨せんべいも一袋ずつ持たせてくれた。

学校に到着すると、僕らは別々の教室に向かう。その瞬間から③僕は、ただ一人の、普通の少年になれる。クラスの子と授業を受けたり、給食を食べたり、その全てがとても楽しい。とくに放課後はレッスンがあつて友達と遊べないので、せめて校内にいる間だけは楽しい思い出を沢山作っておきたいのだ。

昼休み直前、教室でクラスメイトの青野君から声をかけられた。

「なあ、野波。今日も、俺らと一緒にサッカーやるだろ？」

「やりたいけど、桃亜に見つかったら怒られるから……」

「バレなきゃ良いだろ？ お前、ディフェンス上手いから俺のチームにいてほしいんだよ。下駄箱まで、俺の上着を頭から被って隠れてろ。俺がお前を校庭まで連れて行くから。そのまま試合を始めたら、お前の姉ちゃん、どうせ踊るのに夢中で、俺らのことなんて気づかないって」

校内に友達がいけないというのも理由の一つだろうが、放課後のレッスンに向けて、鬼気迫る様子で予習をしているのだった。

青野君に身を隠してもらい、無事に校庭に到着してサッカーをプレーしていると、後ろから誰かに名前を呼ばれた。振り返ると、そこには桃亜がいた。彼女はコートの中に堂々と侵入し、僕を睨みつけている。

「おい！ 皆、一旦止まって！」

青野君が慌てて叫び、試合は中断する。プレーに参加していた誰もが困った顔をする中、桃亜は構わず言った。

「ちよっと十斗。何してるの？ サッカーは足の怪我に繋がるからダメって、リカ先生から散々言われてるじゃない。今まで

「ずっと私に黙ってやってたの？」

「よく僕がいることに気づいたね。でも、桃亜こそ、いつもみたいにバレエの練習をやらなくて良いの？」

あくまでも平和的な解決を目指し、穏やかな口調で言葉を返す。しかし、彼女からは意外な言葉が返ってきた。

「私のことは良いの。問題は、あんた。良い？ 明日からもう絶対にやらないで」

ここで言い返さなければ、僕は友達との貴重な時間を失ってしまうと思っ焦った。

「学校にいる間くらい好きにさせてよ。この時間が僕にとって、唯一の息抜きなんだから」

「は？ 一緒にペアを組む私の身にもなってよ。あんたが怪我したら、私が迷惑でしょ」

「桃亜のことばかり考えていられないよ！ 僕は桃亜と違って友達が多いから忙しいんだ。頼むから僕の学校生活を邪魔しないで。桃亜のそういうところ、いつもウンザリする」

「どうしてそんなことを言うの？ 私は十斗が心配だから言ってるのに！」

④ 桃亜がみるみる涙を浮かべる。思わず救いを求めて青野君を見ると、彼は呆れた表情で言った。

「野波さあ、事情はよく分かんないけど、姉ちゃん泣かすのはまずいだろ。男なんだから」

その言葉を聞くまで、僕は青野君が味方をしてくれると思っていた。それだけ僕らはこれまで一緒に楽しい時間を過ごしてきたし、関係を築いてきたからだ。でも、違った。彼は桃亜ではなく、⑤ 「男だから」という理由だけで僕のことを責めた。とても迷惑そうな顔で。

「とりあえずお前、明日からバレエに集中したら？ 急に試合ストップされると、皆の迷惑だし」

表情に苛立ちが滲んでいる。その瞬間、心のどこかが、また死んだ。桃亜のせいだ。やりとりを聞いていたライバルチームの山田君が、「ってか、男がバレエなんて変なの」とニヤニヤして呟く。すると、桃亜はくるりと彼のほうを振り返って言った。

「今なんて言った？ 十斗はねえ、芸術に身を捧げてんのよ！ 私の弟に文句つけるんじゃないやねえ！ バーカッ！」

あまりの迫力に皆が圧倒されている中、今にも山田君に殴りかかってしまいそうな彼女をコートの外まで連れ出す。そのまま僕はウンザリする気持ちを必死で堪え、校庭の隅で彼女に謝り続けた。

こうして僕は今日、友達とサッカーの両方を一瞬で失った。同じようなことが、これまで何度も繰り返してきている。悲しさを越えて笑いすら込み上げるけれど、彼女の命令は絶対なのだから仕方がない。

それでも、ふと気になり「さっき、なんで守ってくれたの？」と尋ねると「十斗をバカにしたのが許せなかったから」と急に優しい口調で言った。

⑥ 嬉しいような、哀しいような複雑な感情になる。昼休み終了を告げるチャイムを聞くと、僕らはそれぞれお互いの教室に戻った。

放課後を迎えると校門前に集合して二子玉川駅に向かい、そこから電車に乗ってリカ先生の教室に向かった。移動中の桃亜は、さっきとは別人のようにルンロンと鼻歌を歌ってご機嫌だ。退屈な学校生活から一転して、大好きなバレエのレッスンに行けるのが嬉しくてたまらないのだろう。

一方の僕は、友達との大切な時間を失った事実から立ち直れず、気持ちを切り替えるため窓の外を眺めていた。多摩川の空は晴れ渡り、水面に太陽光が反射している。こんなにも心は曇り空なのに、外の世界は信じられないほど美しく、やるせなさを感じる。

その時、ふと視界の左に宙に浮く何かが見えた。よく見るとそれは手のひらほどの大きさのピエロで、彼は先の尖った黄金色の帽子を被り、赤や青で彩られたカラフルな服を着て笑顔で僕に手を振っている。

「あ、また会いに来てくれた」
そう思った。三ヶ月前、リカ先生の教室で練習が上手くいかず桃亜に怒られ続けた時も、今日と同じように見えたことがあった。あの日もピエロは宙に浮きバーレスン中の七海ちゃんの肩に乗ったり、教室の真ん中で生徒達に指導するリカ先生の鼻によじ登ったりして、僕に向かって微笑んでいた。

誰もその存在に気づかず僕だけに見えているようで、最初はとても混乱した。でも、よく観察していると、彼は何か悪さや悪戯をしようとしているのではなく、ただ僕を見守っているだけなのだ。気がついた。そこからは不思議と安心感が芽生え、自分でも驚くほど素直にその存在を受け入れられるようになった。以来、桃亜に理不尽なことで怒られた時や、ママに体重を

管理されてストレスを感じた時、レッスンがハードな時に決まって現れるようになり、彼は黙ってこちらを見つめていた。僕が作り出した幻まぼろしなのだろうということは、何となく分かっている。それでも僕は、その存在に救われた。心の中の、小さな友達だった。

今日、久しぶりに現れた彼は桃亜の肩にちよこんと乗り、小さなサッカーボールを手にし、器用にリフティングを始める。「また友達、いなくなっちゃったね！でも大丈夫だいじょうぶさ！一人でもサッカーは出来るよ！ほーらねっ！」

そんなメッセージを受け取った気がして、笑ってしまう。変わらず悲しみはそこにあっただけれど、少しだけ元気が出た。その様子を、桃亜は気味悪そうに眺めている。

「……十斗。何ひとりで笑ってるの？ 気持ち悪い」

「なんでもないよ。今日もレッスン楽しみだなあと考えてさ」そう言って誤魔化ごまかすと、ちようど目的地の溝みぞの口駅くちに到着する。⑦その瞬間、ピエロは消えた。

(大木亜希子『御伽の国のモアとトト』より)

(注1) オディールバレエ『白鳥の湖』に登場する黒鳥の名前。

問1 波線部A「救世主」、波線部B「鬼気迫る様子」とありますが、本文中での意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「救世主」

ア 全ての人から厚い信頼を得ている存在のこと

イ 強い力を持ちその場を支配する存在のこと

ウ 困難な状況から助け出してくれる存在のこと

エ 誰もがあこがれる魅力に満ちた存在のこと

B 「鬼気迫る様子」

ア すごみを感じさせる雰囲気を持つているさま

イ 怒りに身をまかせて勝手気ままにふるまうさま

ウ まわりから自分がどう見えるか全く気にかけないさま

エ 恥ずかしさを一生懸命に隠しているさま

問2 —線部①「この状況を、双子のじゃれ合いだと思っている」とありますが、十斗はこの状況をどのように感じていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 桃亜の攻撃的な態度を改めてほしいと思うが、自力ではどうして良いかわからず、困惑している。

イ 桃亜の過度な関わり方から距離を取りたいと思うが、これは家族の問題だとしてあきらめている。

ウ 人格を否定する桃亜の発言をうとましく思うが、これをきっかけに七海ちゃんの気をひきたいと考えている。

エ 人前で相手を批判する桃亜の姿勢を嫌だと思うが、桃亜の言うことは事実であると納得している。

問3 —線部②「皆、お月様じゃなくて太陽を見たいの」とありますが、これはどのような考えから出た発言ですか。桃亜

の考えの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

アバレエ教室の先生方は地味な演目ではなく、もつと演者の動きが派手な演目に挑戦することを期待しているということ。
イパパやママは普段は平等に接しているが、バレエに関しては桃亜の方が優れていると評価しているはずだということ。
ウバレエ仲間は表面的には十斗をかばっているが、本心では十斗が桃亜の足を引っ張っていると感じているということ。
エバレエの観客は舞台上の主役である自分に期待しているのであって、十斗は自分の引き立て役に過ぎないということ。

問4 —線部③「僕は、ただ一人の、普通の少年になれる」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア家にいる間は家族との関わりが常にとましく思えるのだが、学校ではその干渉から逃れ自由に楽しく過ごせるということ。
イ学校では勝ち負けがはっきりするライバル関係ではなく、ともに学び生活する仲間という関係を築くことができるということ。

ウ学校にいる間は時間や食事などの制約に縛られることなく、一般的な小学生と同じような経験をすることができるということ。
エ家にいると自分らしさを表現することを求められるが、学校では仲間と一緒にいられる喜びを純粹に感じられるということ。

問5 ―線部④「桃亜がみるみる涙なみだを浮かべる」とありますが、なぜ「桃亜」は「涙を浮かべ」たのですか。その理由の説明

として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十斗が怪我けがをすることでバレエでペアを組む自分に対して迷惑めいわくが及ぶおよことを十斗は理解しているにも関わらず、危ない遊びに自分から参加していたから。

イ 小さなころからバレエのペアを組む十斗は自分のことをよく考えていると思っていたが、思いがけず自分のことを軽く考えていることがわかったから。

ウ 自分がどれだけ十斗のことを心配しているか、いくら言葉を尽くしても、十斗はまったく理解してくれず好き勝手な主張しやうしてくるから。

エ 十斗が怪我をしてしまうことを心配しているのに、自分のことを邪魔者じゃま扱いあつかするばかりでなく、人間関係の築き方についていての非難ひなんまでされてしまったから。

問6 —線部⑤ 『男だから』という理由」とありますが、これに関する次の説明文を読んで(1)～(2)の問いに答えなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

十斗はこの文章の中で三度、「男らしさ」を期待される場面があります。一度目は食事の場面です。パパから「男なんだから、心も身体も大きくなれよ」と言われます。二度目は学校でサッカーをしている場面で、**I(三字)**から「**II(二十一字)**」とたしなめられます。さらに、三度も同じ学校の場面で、山田君から「男がバレーなんて変なの」とからかわれています。

大問2の説明文で、「男性の方が従来のな『男らしさ』女らしさ』に肯定的で、「期待されたり、身につけようとされたりすることになる」と書かれていたことを踏まえると、物語の中で **III** は興味深い一致といえます。

十斗はパパの発言は違和感なく受け止めている一方で、学校で「男だから」という理由で責められたり、からかわれることに対して思い悩みます。それは、女性の競技人口が明確に多いバレーに取り組んでいるからこそ出会った悩みと言えるでしょう。小学校高学年になり、男女の体つきや社会的に求められる規範の違いが強まるなかで、十斗がこの課題に対してどのように向き合っていくのか、注目したいです。

- (1) 空らんⅠ・Ⅱにはいる言葉を指定字数に合わせて、本文から抜き出しなさい。
- (2) 空らんⅢにはいる言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
 - ア 女性の登場人物は「男らしさ」「女らしさ」に対して否定的であるということ
 - イ 三度とも男性の登場人物から「男らしさ」について発言があったということ
 - ウ パパだけが「男らしさ」を前向きな意味合いで使っているということ
 - エ 桃亜も生活場面で十斗に対して「男らしさ」を求めているということ

問7 —線部⑥「嬉しいような、哀しいような複雑な感情」とありますが、どのような感情ですか。その説明として書かれ

た次の文章のそれぞれの空らんにはいる言葉を指定字数に合わせて、文中の表現を用いて答えなさい。

I (十五字以内)

という点では嬉しいが、一方で

II (二十字以内)

という点では哀しい。

問8 —線部⑦「その瞬間、ピエロは消えた」とありますが、十斗にとってピエロはどのような存在ですか。その説明とし

て明らかに間違っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分だけに見える心の中の小さな友達として、安心や元気を与えてくれる存在。

イ 自分が作り出した幻だとわかっているが、それでも確かに気持ちを楽しんでくれる存在。

ウ 辛さや孤独を抱えた時に現れて、自分を見守ることで心を支えてくれる存在。

エ ストレスや悲しさを感じた時に姿を見せて、抱えている問題を解決してくれる存在。

問9 この文章を読んだ学習者が十斗と桃亜の人物像について話し合っています。生徒AとDの中から内容を明らかに読み間違えている発言をしている生徒をひとり選び、AとDの記号で答えなさい。

生徒A：桃亜は学校にいる時間も練習していて、バレエに対する真剣さが感じられるよね。自分に対して厳しい分、十斗に対しても強く当たってしまうのかな。ひとりずつ演じているのではなく一緒に舞台に立っているということも、相手への要求が多くなる理由かもしれない。

生徒B：なるほどね。十斗に対して支配的な態度でいるのは間違いないけれど、一方でからかいから守ろうとするなど、優しい一面もあるよね。サッカーを中断させた場面で十斗から反発されて涙を浮かべている様子からも、単に押しの強い性格だと言いつるのには注意が必要だと思う。

生徒C：十斗も桃亜の強引さに気が滅入ることもあるけれど、一緒に踊ると最強だと認めてもいて、複雑な感情が彼の中で渦巻いているんだろうな。バレエも続けていくけれど、心の中ではただの普通の少年として過ごしたいと思っているのを直接伝えられていないのも悩ましいよね。

生徒D：かといって、弱い存在かというところじゃないと思うんだ。理不尽さや孤独に直面しても、心の中でピエロを生み出し自分をなぐさめる器用さがあるよね。桃亜の力強さとは性質が違うけれど、困難を抱えながらも笑いと優しさを失わないしなやかな強さを持っていると思うよ。

(お わ り)

